

# 高橋俊乗教授の生涯と業績

中 島 萬 朶

## 1. 生 涯



高橋俊乗教授（以下教授と略称）は明治25年5月23日、大阪府西成郡神津村大字小島三番屋敷（現在の大阪市東淀川区十三東ノ町2丁目14番地）善久寺住職高橋俊英の一男四女の長男として生れた。善久寺は西本願寺派に属し、檀徒20戸、信徒50戸、合計70戸と教授は記録されているから、どう見ても裕福なお寺とはいえない。幼時より文筆の才に富み、向学心に燃えていられた教授が、中学校卒業後、師範学校二部に進学されたという、傍系の道を選ばれたのも、その理由の一つは、この点にあると思われる。

六歳の春、教授は村の三津屋小学校に入学され、4年の課程を終え、次いで大阪市立野崎高等小学校に進学、更に4年の課程を終え、明治38年3月に卒業されている。当時尋常小学校は満6歳を以つて入学の始期と定められていたから、教授は1カ年早く入学されたことになる。それでもなお1年歳上の学友に伍して、優秀な成績を得られたことは、教授の凡庸な才能に非ざることを証してあまりある。

明治38年春、教授は14歳で大阪府立北野中学校に入学され、5年の課程を終え明治43年3月卒業されている。教授の中学生時代は、将来の学究の徒としての地盤の基礎付けの時代であったとも見られる。即ち教授は、入学当初から既に文学に興味を見出され、特に平安朝文学を愛好されていたそうである。読書は教授の唯一の趣味であり、またそれによって得られた自己の見解は、泉のほとばしるように、文章として表現されて行った。「春城日記」（春城は教授の生涯用いられた雅号である）は、中学1年より5年間、毎日克明に毛筆で以って書かれており、また校友会雑誌にも、時々寄稿されたそうである。特に明治40年5月、大阪時事新報社が満15歳未満の生徒を集めて、「我が大阪」なる即題の下に、作文を綴らせた時、教授はこれに参加されて、2等賞を得られている。これによって教授は自己の文才に相当の自信を得られたと推察することは、決して不当ではないであろう。しかし多くの文士、文学者に見られる如く、教授は体操は不得手で、特に兵式体操には嫌悪を感じていられたそうである。教授と同時に入学した生徒は約120人、その内約30人が落伍し、残りの約90人が順調に進級して卒業の栄冠を得たそうだから、当時の中学校の学習は相当厳しかったに相違ない。にも拘わらず教授は上位の成績で卒業されている。

北野中学校卒業の後、教授は直ちに大阪府立池田師範学校本科第二部に入学されている。向学

#### 京都大学教育学部紀要 IV

心に燃える教授が、教育の袋小路ともいふべきこの道を選ばれたのは、一寸納得できないように思えるが、さきにも述べた如く、家庭の経済的事情が、その主たる理由をなしているものと思われる。教授の1カ年の師範学校生活は、余裕綽々たるものであったらしい。他の学友が日夜孜孜として勉学するに対して、教授は常に英語の原書を熟読し、しかも試験には、いつも優秀な成績を得ていられたそうである。

明治45年3月、21歳で師範学校二部を卒業された教授は、直ちに出身校である三津屋尋常高等小学校に訓導として奉職され、それ以後3年半の間、若き教師として児童の指導に当たっている。この3年半の教員としての実践的活動は、その後教育学者として大成された教授にとっては、貴重な体験であったと考えられる。

大正4年9月、教授は選科生として、京都帝国大学文科大学（現在の京都大学文学部）哲学科に入学された。専攻は教育学である。この年教授は、宗門の関係上竜谷大学にも入学の希望をもっていたそうであるが、敢えて前者の道を選ばれたのは、賢明であった。というのは当時の京都大学には、教育学の小西重直教授をはじめ、哲学、史学、文学にも錚々たる教授連がいられて、学生達を懇切に指導し、また教育学専攻の先輩、同輩、後輩の学生の間にも、学問に対する情熱に燃える若き学徒が数多くあり、この雰囲気は教授に有形無形の学的刺激を与えたからである。

田舎の小学校教師より、大学生として京都に居を移されてからの教授の旺盛なる研究慾は、専攻の教育学はいうまでもなく、更に日本の古典、日本の歴史にいたるまで、広く且つ深く充たされて行ったことだろうと推察される。大正5年1月、富山房が大正天皇即位の御大礼を記念するために、家庭向きの読物としての「日本歴史」の懸賞論文を広く募った際に、教授はこれに応募され、その結果75篇の応募論文の中から当選の首位に推され、この論文はやがて「国民日本歴史」として富山房より出版され、広く一般に愛読されることとなった。この懸賞論文の審査員は、三上・吉田・幸田及び芳賀の4博士であった。特に三上参次博士は、教授の「国民日本歴史」の序において、『是を以て衆議の末高橋俊乘氏の著の最も平明穩健にして疵瑕少きを択び、之を当選の首位に推し先ず世に公にすることとせり。』と述べられている。このことによって教授の国史上の知識の該博にして且つ史観も穩健、加うるにその平明なる文章が、公けに認められることになったとあって、決して過言ではないであろう。しかもこの榮譽は、教授がまだ学窓にありし頃のことである。

教授は大正7年7月、3カ年の選科生としての学生々活を一まず終えられている。卒業論文は「希臘教育思想の發展」であった。東洋及び日本の思想に深い関心を持っていた教授が、この論題を選ばれたことは、一寸奇異に感ぜられるが、教育学者及び教育史専攻学者として大成されようとするその出発点に、希臘の教育思想と取組まれたことは、極めて妥当な行き方であった。西欧的な思想及び思考方法を基礎としなければ、教育学もまた日本教育史も大成されないからである。

教授は選科修了後、直ちに京都市立高等女学校に奉職され、教職の傍ら高等学校卒業検定試験

の準備をされ、大正9年9月芽出度く合格されて、再び本科生として京都帝国大学文学部に入学され、同年10月卒業されている。この間の在学は、学士の称号を得るための形式的なものにすぎなかった。従って教授は、大正7年に卒業した8名の教育学専攻の人びとと同輩の關係にあり、その後これらの人びとと親交を深められていたが、その8名の内5名の人が既に他界の人となられ、現在なお教育界に活躍されている人びとは、玉川学園の小原国芳氏、愛媛大学の行元豊円氏及び津市の尾鍋秀雄氏の3名に過ぎない。

教授は京都帝国大学を卒業されると、直ちに大学院に入学され、昭和3年12月まで在籍されている。大学院における研究題目は、「徳川時代の教育思想」であり、指導教官は小西・藤井・高瀬の3博士であった。教授はこれより本格的に日本教育史の研究に専念されたようである。というのは教授の主著の一つである「日本教育史」が出版されるまでに、既に二三の研究論文が、「哲学研究」誌上に発表されているからである。

教授は大正12年4月より、竜谷大学の講師となられ、更に昭和2年6月には教授に昇進され、教育学講座を担当し、その生涯を終えられるまで、約20年間を宗門の子弟の教育のために尽瘁されている。更にその傍ら、母校の京都帝国大学をはじめ、大阪商科大学、臨済宗大学、京都真言宗大学、大阪府立女子専門学校及び光華女子専門学校等にも出講され、教育者としての生活は益々多忙を極めたにも拘わらず、学者としての研究業績も、数多く発表されている。このことは教授の非凡なる才能と旺盛なる研究心によることであって、凡庸なる人びとには到底なし能わざることである。

教授の主著「日本教育史」は大正12年3月、「日本教育文化史」は昭和8年5月に、それぞれ出版されているが、大正10年より昭和8年までの間において、教授は18篇に及ぶ論文を、当時の学術雑誌に発表されている。従って教授の30代から40代の初めの頃が、最も研究に熱の入った時代であったように考えられる。特に大正15年12月、教授が「哲学研究」に載せた論文「石川謙氏の寺子屋起源論について益を請ふ」は、当時石川謙氏が、「教育論叢」に3回に亘って連載発表された「寺子屋の意味、語史及び起源について」の論文を、真向から批判されたものであって、これに対する石川謙氏の応答は、「寺子屋史研究の方法論に関して高橋文学士の批評に答ふ」の論題で、次号の「哲学研究」に載せられている。この東西両教育史家の論争は、日本の教育学の歴史において特記すべきことであり、その内容に関しては、他日この方面の研究家の批判に俟すべきであるが、教授は当時35歳の若さであり、石川謙氏も教授より一年歳上の36歳であったので、両雄相競う状態であつたらうと想像される。しかもその挑戦は教授によってなされたので、教授の晩年の温厚な風容に接していた者としては、矢張当時の教授は若々しい覇気に漲っていたのであろうとの観なきを得ない。

京都大学における教授の講義は、主として日本教育史に関するもので、これは恩師小西教授の特別の配慮によって、昭和3年4月より教育学特殊講義として開講されたものである。教授のこの講義担当によって、当時の若い学徒の日本的なるものへの研究慾を促進せしめたことはいうま

#### 京都大学教育学部紀要 IV

でもないことである。

昭和10年5月、教授は昭和9年度海外研究生として、竜谷大学より教育学研究のため、欧米に留学、昭和12年1月帰朝されている。この1年9カ月に亘る教授の欧米留学の主なる目的は、欧米の教育思潮の实地調査であり、主なる滞在国はドイツであった。当時のドイツは、既にヒットラー独裁政権が確立され、第二次世界大戦への準備態勢が着々として進められていた時代であり、教育の方面においても、ヒットラー・ユーゲントや、アールバイツ・ディンストの組織が出来上がっていて、教授の眼は、その澁刺とした国防国家体制の進展に魅せられたことであろうと考えられる。教授帰朝後の日本の状況は、ドイツと殆んど同じ運命を辿って行ったものであり、従って教授の帰朝談は、当時到着地で歓迎されることとなった。

昭和14年2月、政府が皇紀2600年奉祝事業の一つとして、「日本文化大観」の編纂の事業を企てるや、教授はその編纂委員として参画、また昭和16年5月、文部省出版の「国史概説」の編纂にも参加されている。しかし何よりもまして教授が光栄に感じられたのは、昭和17年8月、嵯峨天皇1100年祭に際し、宮中において天皇・皇后両陛下に「嵯峨天皇御事蹟」について御進講されたことであろう。その時の模様を得意げに話された教授の面影が、今なお私の脳裡には残っている。

昭和20年11月、教授は竜谷大学にその論文「近世学校教育の源流」を提出して、文学博士の学位を受けられた。教授が竜谷大学に博士論文を提出された主なる理由は、自身が宗門の子弟であり、且つ同大学の教授という切っても切れない深い関係があったためであろう。しかし教授の学者としての業績は、既に公けの認めるところであり、この榮譽は教授にとっては、余りにもおそ過ぎたように感ぜられる。

終戦後の日本の社会は、大きな変革期に際会した。教育界もこれに洩れず、民主主義的教育思想の洗礼を受け、アメリカの教育制度、思想、技術等は、日本を風靡した観があった。日本教育史の研究家であり、また曾てヒットラー専政時代のドイツに留学した経験を持った教授としては、一時の日本復古主義の思想に魅せられんとする危険はあったが、あくまで客観的に事実を検討批判する教授の科学的態度とその穩健な思想とは、超国家的、軍国的思想に踏み切ることを阻止した。従って教授は公職追放にもならず、この思想的難関の時期を乗り切られたのである。

当時の教育界は、民主主義思想に転換したものの、その指導理念については、学者、有識者に期待するところ切なるものがあった。従って終戦後一二年の間は、教授は各地に赴いてその啓蒙に当られた。

昭和22年が押し迫った頃より、教授は風邪気味にて自宅に引籠られていたが、翌昭和23年2月21日、京都大学教育研究会が、京大文学部研究室に催された時、丁度恩師小西教授も出席されたので、教授は無理を押してこの会合に出られたが、小西教授の勧めにより、直ちに帰宅病臥されたようである。従って小西教授と教授との会合は、この時が最後であり、また同時に私達と教授との会合も最後であった。最初風邪とみられた病気は、結局は肺臓がんの初期的症状であった。

教授は昭和23年6月16日、57歳（満56歳）をもって遂に不帰の客となられたのである。

教授56年の生涯は、医学の進歩した今日から見れば短命であるといってもよく、天が若しもう暫らくの余命を与えたならば、なお数々の業績が期待されたであろう。しかし短命とはいえその生涯を日本教育史研究のために尽されたその努力並びにその功績は、永久にわが国教育学史上に光彩を放っているであろう。

教授は生涯を通じて、真に学究の徒であった。読書の外に、これといった趣味、娯楽は殆んどなく、読むことと書くことと話すこととに、その日々を過していられたといっても過言ではなからう。昭和6年秋、北白川の地に今のお宅を新築され、汗牛充棟ともいうべき教授の蔵書は、鉄筋コンクリート造りの8畳の応接室の2階の書庫に収められた。しかしその後月々に加わる購入図書は、その書庫にも収まり切らず、書齋、廊下にまで並べられる有様となり、永眠せられる当時は、1万冊の蔵書があったということである。しかし教授の蔵書慾も、世の所謂つんどく主義ではなく、実に寸陰を惜んで読書せられることによって、満足せられたのであった。『電車の中で読書して博士になった人もある』と、後輩のわれわれの不勉強を戒められていたが、教授自身もこれを実践され、ある日教授が車中読書に耽っていた時、偶然教授の長女が隣の席に坐られたことも気付かれなかったという逸話も残っている程である。

## 2. 業 績

教授は56年の長からぬ生涯にも拘わらず、著書10数冊、論文30余篇に及ぶ多くの業績を日本の教育学の分野に残されている。これらの業績のすべてについてここに記述することは、紙数の制限上到底不可能なことであるから、その中の主著とも見らるべき、「日本教育史」、「日本教育文化史」及び「近世学校教育の源流」の三つを選んで、その教育史観及び教育学的立場について述べてみよう。

「日本教育史」は、教授32歳の主著であり、大正12年3月に出版された。この書は<sup>(1)</sup>唐沢富太郎氏も述べられている如く、その前年出版せられた吉田熊次博士の「本邦教育史概説」と共に、わが国教育学専攻学者の手によって書かれた最初の日本教育史の著書として教育学史上特記すべき力作である。しかも前者が明治以後の教育の記述に主力が注がれているのに対して、後者は国史全般の見通しの下に、敘述されている点に一層意義深いものを感じる。

この書の序によせて、恩師小西博士は次の如き注目すべき言葉を述べられている。『<sup>(2)</sup>教育史の中で論述さるる所のは主としては時代を指導する教育教化の制度や思想の変遷であるけれども、これは教育史の全体ではない。(中略)英雄の歴史、偉人の歴史は民衆の歴史と相俟って一体の人生史をなすものであろう。(中略)民衆の文化、民衆の習慣乃至民風といった様なものは、指導理念が民衆によって意識的又は無意識的に生活化されたものである。更に『<sup>(3)</sup>斯様な意味に

(1) 唐沢富太郎 日本教育史 9頁

(2) 高橋俊乗 「日本教育史」 序 2頁

(3) 高橋俊乗 「日本教育史」 序 3頁

於て少くとも現代の教育者は自ら歴史を造りつつある一員であり、自ら新理想新理念を暗示し来る力であるのである。従って教育者が教育史を研究することは教育的活動を全体として研究する許りではなく、全体の一部としての自己自身を研究しつつあるのである。』

この小西博士の言を如実に体現されたのが、教授であった。教授がこの書を公けにされるまでの日本の教育学分野では、教授も述べていられる如く、教育史といえ、西洋の教育史のみを意味し、日本の教育史もごく一部の研究家に委ねられ、一般の教育学者、教育家は、余り関心を持っていなかったのである。この責任を自から負うて立たれたのが教授であった。

教授によれば、従来の日本教育史の研究方法には二つのものがあつた。第一は教育制度史的なもの、第二は教育学説史的なものである。即ち前者は学校などの施設制度、武士道の発達等の外面的に現われたものの沿革の研究であり、後者は為政者若しくは教育上の先覚者が、国民或は後覚者を道徳的、学術的に指導し来た思想の研究である。ところが教授はこの両者には満足せられず、日本の太古より引続き今なおわが国の教育の基礎となっている教育せんとする意志の発展を明らかにすることを以て日本教育史の主眼とされている。従つて前二者が外面的・客観的な教育史の叙述であるに対して、教授の立場は主観的な教育精神発達の歴史叙述である。しかしこうなると教化史・政教史・文教史等と類を同じくするように考えられるおそれがあるが、教授は教育学者たる自覚の下に、教育史を教育学の一部と見て、文教史的な教育史をもっと狭く限定して、この種の歴史観と、前二者の客観的教育史観との折衷をもって、自己の教育史観とされたようである。

教授の述べられていることによると、教育とは『<sup>(4)</sup>或時代の人々が獲得したる文化を、次の時代の人びとに伝える方法又は形式であり、(中略)文化の発展し行く原動力である。』従つて教育学説の上からいえば、教授はシュブランガーなどの主張する文化教育学的立場をとられているように解せられる。さて教育を文化の原動力として考える場合、代々の人びとが子孫に文化を伝えんとした活動の変遷、即ち教育せんとする意志の歴史を研究することが教育史の課題となる。従つてわが民族が代々その子孫を教養せんとして努力した精神の発展が、教授のいう日本教育史である。

これを教育内容の上より見れば、奈良平安時代は美の教育 鎌倉・室町時代は聖の教育・健の教育・善の教育 江戸時代は善の教育・政治の教育 明治時代は真の教育・経済の教育が比較的著しかつた。また教育の普及の状態からいうと、平安時代以前の組織的教育は主として貴族に行われ、鎌倉室町時代にそれが武士にまで拡充され、江戸時代になって平民にも普及し、明治時代に至つて所謂教育上の機会均等が行われるようになった。結局教授の考えによると、明治・大正・昭和の教育の顕著な発展は、唯欧米の教育の力とのみ考えることは誤りで、これを輸入し模倣する基礎には、わが国3000年来の文化の長い発達があり、この長い国史の間に蓄えられた精神文化がなければ、今日見るが如き盛時を来すことができなかつたのであると見ていられる。

(4) 高橋俊乗 日本教育史 6頁

教授の次の主著「日本教育文化史」は、教授42歳の著作であり、昭和8年5月に公けにされている。当時のわが国史学分野が、文化史的考察に傾いて来た客観的状態もあり、<sup>(5)</sup>また唐沢富太郎氏も指摘される如く、昭和7年2月に出版された西田直二郎博士の「日本文化史序説」の影響もあったと考えられるが、しかし教授の前著「日本教育史」には、既に教育文化史へ発展し行く萌芽が内在していたことは、今まで述べて来たことによって容易に推察し得ることである。

この書においては、教授は教育史を教育思想史又は教育学説史と、教育実際史との二つに分類し、狭く教育史といえは後者のみに限定している。即ち実際に先覚者が後覚者を指導し、社会が成員を仕立てて来た跡づけが教育の歴史に外ならないからである。ところでこのように狭く教育史を考えれば、思想史が含まれず、また教育実際史では一般化しないから、教授は教育文化史としてこの両者を包含されようとしたものと考えられる。しかしこの際教育実際史についての従来の概念の誤解を、教授は二つばかり指摘されている。その一つは教育内容即ち文化内容そのものの変遷発達を教育史の中に含まねばならぬと考える誤解であり、他の一つは教育と学問との混同である。即ち学問そのものと、学問を教育することとは全然別であるに拘わらず、これが屢々混同されている点である。即ち教授の考えによれば、既に述べた如く、先覚者が後覚者を指導し、社会が成員を仕立てて来た跡づけが教育の歴史であるから、この範疇に入らないものは、教育文化史の中に取り入れるべきでないというのである。

教授は本書の冒頭において、教育の本質に関して次の如く述べている。『教育の本質は、教育者が抱いている教育的思慕によって、被教育者の抱いている文化的思慕を刺戟促進して、以て被教育者の文化活動を向上進展せしめることに外ならないのであるが、これを外面的形式的に観察すれば、先覚者を模範として後覚者が先覚者の進んだ道をたどることであるから、一語で簡単に云うならば、模範から模倣への推移、或は模範と模倣との関係が教育である。故に教育自体は先覚者のみにも後覚者のみにも存しない。先覚者と後覚者との相互関係に教育の真相を見ることが出来る。』これは教授も記していただける如く、昭和7年出版された恩師小西博士の「教育本質観」の教育理念であり、これを教授の歴史家的立場から、解釈展開されたものであると考えられる。上述の教授の『模範から模倣への推移、或は模範と模倣との関係が教育である』という考えは、昭和19年3月に出版された教授の著作「道の伝統」において、更に具体的に強調されているが、教授の「日本教育史」に観られた『わが民族が代々その子孫を教養せんとして努力した精神が、日本の教育文化史の原動力である』という史観は、依然としてこの書を一貫しているものと見られる。即ち教授は、わが国において自覚的教育が始められてより、明治時代に至るまでの教育の変遷を、次の4期に分けられている。

第1期上古(推古時代—平安時代末)は支那の教育を模倣した時代。第2期中世(鎌倉時代—戦国時代)の教育は、寺院における俗弟子教育を中心とした教育。第3期近世(桃山江戸時代)は上述の基礎の上に支那の教育を同化綜合した時代。第4期(明治時代)は西洋の教育輸入の時代。し

(5) 唐沢富太郎 日本教育史 8頁

かして『明治初年以來西洋の学制や教育方法を多く伝えたので、一見維新前の教育と今日のそれとは全然別箇のもの如く見えるけれども、尙仔細に考究して見れば、教育の精神、中枢は依然として旧のままであり、実際の方法に於ても、今日尙旧を伝えているものが多いのである』ともいってられる。従って教授の「日本教育史」と「日本教育文化史」との間には、その形式においては発展の跡が見られたが、重なる史観の変遷は殆んど認められないのである。

教授の第3の主著「近世学校教育の源流」は昭和18年4月に公けにされたものであり、教授52歳の力作であると同時に、博士論文ともなったものである。

この書の主眼とするところは、わが国の学校教育が、上古においては支那の教学制度や教育内容を、明治維新以後においては、西洋のそれを採択して発展して来たものと一般に見られているが、それは誤解であることを解明せんとすることにあつた。即ち教授の考えによれば『支那の教学制度や内容を受け入れる以前には、わが国独自のものがあつた筈であり、(中略)また明治維新以後西洋の教学制度や内容を採択せんと努力した時にも、採択すべき主体的な本邦独自の教学が儼として存在していたのである。』これを学校教育制度の面から取り上げたものが、本書の内容をなしている。

教授はわが国近世学校教育形態の主たる源流を、次の二つの系統に分類している。即ち(1)は学園形式の源流であり、上皇室の御好学の感化として下臣民に普及した学校形態であり、いわば上から下への教育形態である。(2)は寺子屋形式の源流であり、これは庶民階級の間から盛り上つた学校形態であり、いわば下から盛り上つた教育形態である。(3)は勸学院形式の源流であり、僧侶が自ら自己を教育せんとして起した学校形態であるから、これは下からの教育の中に包括される。現代教育の空前の大進歩は、結局この上からの教育と下からの教育とが合体して一の大組織となつた結果である。この教育上の上下一致は、わが国体の特長たる一君万民、君民一体の淳風が、直接にわが国教育史上に顕現したものに外ならないと述べて、教授はこの論文を結んでいられる。

以上教授の主著三つを通じて、教授の教育学・教育史観を素描的に述べて来た。この3著を一貫して流れている思想は、わが民族が代々その子孫を教育せんとする意志の発展であり、その精神の発展史が、わが国の教育史に外ならない。教授はその教育事実を、広く他の文化との関連において把えようとし、その研究態度は、あくまで実証的、客観的であつた。<sup>(6)</sup>唐沢富太郎氏の指摘せられる如く、教授の著書には教育哲学的素養の比較的乏しさを感じさせる点があるとしても、その国史一般に通ずる該博なる知識と、克明に引証せられている客観的資料の豊富さとは、その欠点を補つて余りあるものがあり、日本教育史研究の学徒には、欠くことの出来ない貴重な文献である。

追記 この稿を終えるに当り、貴重な資料を御提供下さつた高橋教授夫人並びに竜谷大学における教授の在りし日のことなどについて種々御教示下さつた、同大学教授山崎照見氏に深く感謝する次第であ

(6) 唐沢富太郎 日本教育史 12頁



## 高橋俊乗教授の生涯と業績：中島

る。

なお教授は大正10年12月に結婚され、夫人との間に一男二女を得られ、長男は京都大学農学部を卒業後、現在朝日ビール会社に勤務され、長女は京都大学医学部薬学科教授宇野豊三氏に嫁がれ現在二女の母となられ、次女は現在京都市立美術大学に在学されている。

### 高橋俊乗教授略年譜

- 明治25年(1892) 5月23日 大阪府西成郡神津村大字小島三番屋敷(現在大阪市東淀川区十三東ノ町2丁目14番地)善久寺住職高橋俊英の長男として生る。
- 30年(1897) 4月 大阪府西成郡神津村立三津屋尋常小学校に入学
- 34年(1901) 3月 三津屋尋常小学校(修業年限4カ年)を卒業
- 4月 大阪府立野崎尋常高等小学校に入学
- 38年(1905) 3月 野崎尋常高等小学校(修業年限4カ年)を卒業
- 4月 大阪府立北野中学校に入学。
- 43年(1910) 3月 北野中学校(修業年限5カ年)卒業
- 44年(1911) 4月 大阪府立池田師範学校本科第二部に入学
- 45年(1912) 3月 池田師範学校本科第二部(修業年限1カ年)を卒業
- 4月 母校である神津町立三津屋尋常高等小学校に訓導として奉職
- 大正4年(1915) 9月 三津屋尋常高等小学校を退職 京都帝国大学文科大学(現在京都大学文学部)哲学科選科に入学 教育学専攻
- 7年(1918) 7月 京都帝国大学文科大学哲学科選科修了 卒業論文「希臘教育思想の発展」
- 10月 京都市立高等女学校(現在堀川高等女学校)教諭心得として奉職
- 8年(1919) 2月 京都市立高等女学校教諭となる(大正9年11月まで在職)
- 9年(1920) 9月 高等学校卒業検定試験に合格 京都帝国大学文学部哲学科に本科生として入学
- 10月 京都帝国大学文学部哲学科卒業
- 11月 京都帝国大学大学院に入学(昭和3年12月まで在学) 研究題目「徳川時代の教育思想」
- 10年(1921) 4月 私立京都高等女学校教諭兼京都女子専門学校講師となる
- 7月 京都高等女学校教諭退職
- 12年(1923) 4月 竜谷大学講師となる
- 14年(1925) 4月 臨済宗大学教授となる(昭和3年3月まで在職)
- 15年(1926) 4月 京都真言宗大学教授となる(昭和2年3月まで在職)
- 昭和2年(1927) 3月 大阪府立女子専門学校教授嘱託となる(昭和4年3月まで在職)
- 4月 竜谷大学教授嘱託となる
- 6月 竜谷大学教授に任ぜらる 教育学講座主任
- 3年(1928) 4月 仏教専門学校講師となる(昭和8年3月まで在職) 京都帝国大学文学部昭和3年度講師嘱託を受く
- 5年(1930) 3月 京都帝国大学文学部昭和5年度講師嘱託を受く
- 6年(1931) 3月 大阪商科大学昭和6年度講師嘱託を受く
- 7年(1932) 3月 京都帝国大学文学部昭和7年度講師嘱託を受く
- 8年(1933) 3月 大阪商科大学昭和8年度講師嘱託を受く
- 9年(1934) 3月 京都帝国大学文学部昭和9年度講師嘱託を受く
- 10年(1935) 5月 竜谷大学より海外研究生として、教育学研究のため欧米留学を命ぜらる

## 京都大学教育学部紀要 IV

- 12年(1937) 1月 欧米より帰朝  
13年(1938) 3月 京都帝国大学文学部講師嘱託を受く(以後昭和21年6月まで毎年継続)  
14年(1939) 2月 日本文化大観編修会委員を命ぜらる  
16年(1941) 5月 国史概説編纂を嘱託せらる  
17年(1942) 8月 天皇皇后両下御前にて嵯峨天皇御事蹟につき進講仰せつけらる  
20年(1945) 11月 竜谷大学より文学博士の学位を受く 論文題目、「近世学校教育の源流」  
23年(1948) 6月16日 京都市左京区北白川小倉町50の自宅において、肺がんのために病歿 墓は大阪市東淀川区十三東之町善久寺にあり

## 高橋俊乗教授著書および主要論文

### 1 著 書

- 国民日本歴史 富山房 大正5年6月  
日本教育史 教育研究会 大正12年3月  
サックスビー原著抄訳 行動の教育 内外出版社 大正12年9月  
明治前半期の教育制度とその精神 玉川学園 昭和8年1月  
日本教育文化史 同文書院 昭和8年5月  
教育思潮と国史教育 晃文社 昭和12年11月  
中江藤樹 弘文堂 昭和17年9月  
近世学校教育の源流 金港堂 昭和18年4月  
世阿弥元清 文教書院 昭和18年10月  
道の伝統 全人社 昭和19年3月

### 2 主 要 論 文

- 伊藤仁斎の教育効果論 哲学研究 大正10年8月  
大宝令に定められたる大学寮の教育史上における意味 哲学研究 大正11年7月  
綜芸種智院について 哲学研究 大正12年8月  
令制の国学について 哲学研究 大正13年5月  
武士道の起源及び特質 哲学研究 大正13年8月より11月まで4回掲載  
我が国古代の道徳と儒教 哲学研究 大正14年9月より大正15年1月まで4回掲載  
平安時代の所謂私学に就いて 歴史と地理 大正15年9月より10月まで2回掲載  
石川謙氏の寺子屋起源論について益を請ふ 哲学研究 大正15年12月  
「ちご」の教育 哲学研究 昭和2年9月より10月まで2回掲載  
平安時代の学習内容 歴史と地理 昭和3年1月  
日本教育史上の手習 哲学研究 昭和3年5月より10月まで3回掲載  
日本宗教々育史 宗教々育講座 昭和2年以降5回掲載  
藤樹著山二氏の神道説を論じて神道大義の著者に及ぶ 高瀬博士還暦記念支那学論叢 昭和3年10月  
寺子屋に於ける天満天神の信仰 芸文 昭和4年5月より6月まで2回掲載  
中江藤樹の差別観と平等観 竜谷大学論叢 昭和5年5月  
藤樹学派の仏教観 宗教研究 昭和6年11月  
江戸時代以前の教育 教育科学講座 昭和6年12月  
文化史上に於ける白鳳時代の教育制度 夢殿 昭和7年4月  
五山文学に見えたる村校に就いて 竜谷大学論叢 昭和7年4月

高橋俊乗教授の生涯と業績：中島

荻生徂徠の教育基礎論	哲学研究	昭和7年9月
日本教育史研究の意義	教育	昭和9年1月
伝教弘法二大師の教育思想	夢殿	昭和9年6月
日本歴史教育史	歴史教育講座	昭和10年6月
各時代における日本婦人の教養	歴史教育	昭和12年6月
寺院に於ける学問発達の初期	竜谷学報	昭和12年11月
教育目的としての儒仏一致論	宗教研究	昭和14年6月
日本教育と仏教	竜谷学報	昭和15年12月
学問所の源流とその展開	教育学研究	昭和17年5月より8月まで4回掲載
世俗教育の教科書として用いられた法華経	竜谷大学紀要	昭和19年
一般文化史より観たる江戸時代の竜谷学庠	竜谷大学紀要	昭和19年
蕃山の学塾における日本的要素	竜谷大学紀要	昭和19年
教育学概論(上)	京都文科大学通信教育講座	昭和23年4月